

Science Report of Kushiro City Museum

釧路市立博物館報

NO.418



2016.9

「80周年・進化し続ける博物館」

当館は、昭和11年（1936年）「釧路市立郷土博物館」として創立、この7月14日で80周年を迎えました。東北海道で最も長い歴史を誇り、創立以来、展示内容等について高い評価をいただき、多くの先人達の情熱と地道な努力により引き継がれてきた所蔵品は現在、約14万点に及んでいます。

そして、当館の初代館長、片岡 新助（かたおか しんすけ）氏が、自ら蒐集し当市に寄贈された「片岡コレクション」の一部を主展示品としてスタートした当館は、今、新たな局面を迎えています。

現在の「釧路市立博物館」が昭和58年（1983年）11月3日にオープン以来、4階で常設展示されてきた、片岡氏寄贈の「アイヌ民族木綿衣」1着が、大阪府の国立民族学博物館等の研究グループから、世界最古級である可能性が高いとの評価を受けている状況にあります。

現在、世界最古とされているロシア科学アカデミーのピョートル大帝記念人類学民族学博物館所蔵の「アイヌ民族木綿衣」2着と、当館所蔵の1着との類似性が多々あり、同じ時期に同じ場所で作られた可能性が高いと研究グループは評価しています。来年3月頃に、正式に研究結果が公表される予定となっており、世界最古の評価確定への期待が高まっています。

今年1月、当市は、2020年の「東京五輪・パラリンピック」開催までに、外国人観光客を増やすための国の「観光立国ショーケース」事業のモデル都市に金沢市、長崎市とともに指定されたこと

を受け、国に対する49項目の要望事項を8月にまとめ公表しています。

この中で、当館については「アイヌ関連資料展示の充実」が記載されており、今後、前述の「アイヌ民族木綿衣」を筆頭に、当館の「アイヌ民族関係所蔵品」を活用した、様々な展示内容の魅力向上策が進められることとなります。

また、当館では現在、1階の魚類常設展示コーナーのリニューアルを進めています。既に今年3月末に一部実施し、残りの部分について11月までに完了しリニューアルオープンする運びとなっています。多くの魚類の剥製や精巧な複製、高画質大型モニターによる釧路近郊の水中映像等、今までにない迫力と躍動感あふれる新しい展示をお楽しみいただけるものと考えております。

博物館法において、博物館の重要な役割は「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学などに関する資料の収集と保管」と、「教育的な配慮のもと、資料を展示し一般の人々に鑑賞してもらうこと」となっております。

当館も、貴重な所蔵品の保護保全に配慮しながら、そして、展示内容は、極力、実物、ファクトにこだわりながらも、「温故知新」、来館の度に、何か新しいものを発見していただけるよう、職員一丸となり展示内容の魅力と機能を向上させ、多くの皆様に親しまれるよう進化し続ける所存です、ご期待ください。

釧路市立博物館 館長 白幡 敏弘

9月号目次

「80周年・進化し続ける博物館」	白幡 敏弘	2
企画展 釧路市立博物館80周年記念企画展「知られざる釧路湿原」	貞國 利夫 編	3
博物館創立80周年の取り組み	80周年プロジェクトチーム	9
チャランケチャシ	加藤ゆき恵・渡邊聖知子	11
博物館ニュース		12



釧路湿原に生息するクイナ

〈表紙写真〉 創立80周年記念企画展「知られざる釧路湿原」（7月2日～9月25日）より、釧路湿原に生息するクイナの様子。夜間中心に活動し、湿原に生息しながらこれまでスポットを当てられていませんでした。今回の企画展では、その暮らしぶりについても紹介しました。
(貞國 利夫)

釧路市立博物館館報 No.418 2016年9月号 2016年(平成28年)9月30日発行

発行 釧路市立博物館 〒085-0822 釧路市春湖台1-7

☎ 0154-41-5809(博物館)・43-0739(埋蔵文化財調査センター)/ FAX 0154-42-6000

釧路市立博物館Web <http://www.city.kushiro.lg.jp/museum/>

museum@city.kushiro.lg.jp(博物館) maibun@city.kushiro.lg.jp(埋蔵文化財調査センター)

発行責任者 白幡 敏弘 編集 石川 孝織・貞國 利夫 印刷 (株)藤プリント

平成28年度 釧路市立博物館80周年記念企画展

知られざる釧路湿原

貞國 利夫 編*

1. 釧路湿原の概要

成り立ち

釧路湿原の形成は、約2万年前の最終氷期の頃から始まります。この時代の気温は現在より10度近くも低く、海面は100mほど低下したため、今日の釧路湿原は平らな台地となり、川がこの台地を侵食し、現在の河川や谷の原型をつくっていきました。

その後、地球の気温の上昇と共に極域などの氷が溶けだし、海面が上昇し海がひろがる「縄文海進」が始まりました。約6,000年前には、もっとも奥深くまで海水が侵入し、現在の釧路湿原の辺りは海に覆われ、いくつもの入り江をもつ複雑な形をした「古釧路湾」ができます。次に、4,000年ほど前の時代になると、湾の入り口、現在の釧路市街西側の海岸に運ばれた砂が砂嘴を形成し始めます。これによって湾が閉じられる一方で、このころを境に地球の気温は徐々に低下し始め、今度は逆に陸地が広がる「海退」へと変わりました。

こうして湾は湖へと姿を変え、さらに長い年月をかけて徐々に土砂や堆積物で埋められていきました。また、流れ込む川の水によって淡水化も進み始め、今から約3,000年前に、湿原の東側にシラルト口湖、塘路湖、達古武沼の湖沼を残して現在の釧路湿原が誕生しました。

地形

釧路湿原は丘陵や台地、高い崖に囲まれています。これらは昔、ここに海が入って削った海岸の海食崖と考えられています。また、釧路湿原内の地形は、水が東に集まることも特徴の一つです。これは釧路川やその支流群の流れ方、湖沼の偏りにも現れており、湿原の西側より東側の方が低いことを表しています。湿原の西側と東側の標高差は5～7mほどあり、湿原の形をよく見ると、湿原の西側は東側に比べて地形が入り組んでいるのがわかります。水の通り道も、東側は直線状ですが、西側では急な蛇行を繰り返しています。これは西高東低の地形によって、高いところほど川が出来やすいことから、

このような環境になったと考えられています。そして、この事は過去に湿原ができる過程の中で、西は隆起し東は沈下するという地盤運動があったことを物語っています。この活動は約6,000年前から始まっており、現在も続いています。

湿原になる条件

湿原は、過湿な草原であり、泥炭を形成している泥炭地ともいわれます。泥炭はスポンジのように水を吸い込んで、踏みしめると水がじゅくじゅくと染み出してきます。湿原ができ、これを維持するためには泥炭も水も欠かせません。また、たくさんの水が絶えず供給され、しかもこれを溜める浅い所や低い気温も泥炭のために必要です。他にも、広い低地帯も大きい湿原を形作る上では重要です。

泥炭は分解されないで残った湿原植物の遺体です。湿原植物は秋に枯れて水に浸かります。流れのない溜まり水では、溶存酸素が少ないために分解する微生物の動きは不活発で、また水温も低いために遺体は完全に分解されません。よって、未分解の植物遺体は水底に残ります。これが毎年繰り返され「草の漬け物」となって厚くなるのです。1年にできる泥炭はわずか1mmぐらいといわれ、3mの泥炭は3,000年という長い時間がかかると考えられています。

2. 釧路湿原を支える植物 (加藤ゆき恵)

ここからは、春から夏に発生する海霧による低い日照率と、年平均気温が北海道内の中でも特に低いことなど特殊な環境によって形成された、釧路湿原に生息する生き物たちを紹介します。

釧路湿原の大半は、地下水位の高い場所に成立する「ヨシ・スゲ湿原 (低層湿原)」が広がっています。場所によっては3m近い高さのヨシが密生し、その間にサワギキョウ、シロネなどが生えています。一見地味で、ただの「くさむら」に見えるヨシ・スゲ湿原は、釧路湿原の重要な構成要素なのです。

湿原の「スゲ」

「スゲ」とは狭義にはカヤツリグサ科スゲ属

(*Carex*) 植物をさし、広義には近縁のヒゲハリスゲ属 (*Kobresia*) 植物などを含みます。スゲを含むカヤツリグサ科植物は海岸から高山帯までさまざまな生育環境に広く分布しますが、ほとんどは湖沼や河川の岸などの湿った場所に生育します。日本には約300種類のスゲが生育しています。北海道の湿原に分布するスゲは、北半球の高緯度地域を中心に分布する北方系の種類が多く、日本国内では釧路・根室などの道東太平洋側にのみ生育する種類もあります。

湿原内の地下水位や栄養分の環境に対応して、生育するスゲの種類が変わります。地下水位の高い湿原にはカサスゲ、ヤラメスゲなど、地下水位の低いミズゴケ湿原にはトマリスゲ、ミズゴケ湿原内の滞水したシュレンケ (小凹地) 周辺にはヤチスゲが見られます。

湿原の「ヨシ」

ヨシ *Phragmites communis* (イネ科) が優占する湿原は、地下水位が高く、泥に足を取られるため、歩くのは容易ではありません。ヨシは富栄養な湿原の指標種となる植物ですが、耐塩性も高く、海水の影響を受ける塩湿地にも生育します。北海道各地の低湿地に広く分布し、アイヌ語でヨシを表す「サル」「サロ」「シャリ」がついた地名が各地にあります(サロベツ、沙流、猿払、佐呂間、斜里など)。

ヨシは北海道から沖縄まで日本全土に多く見られ、全世界の湿地に^{よしず}くまなく分布しています。軽くて丈夫なことから、葦簀や茅葺き屋根の屋根ふきに用いられています。釧路湿原を見下ろす北斗遺跡の復元竪穴住居の屋根ふきにもヨシを使っています。

ミズゴケ類

泥炭層が発達して河川水の影響を受けにくくなった場所では、地表面は雨や霧のみで涵養されるため貧栄養条件となり、ミズゴケ類を主体とする湿原が広がっています。保水性のあるミズゴケの上にはツルコケモモ (図1)、モウセンゴケ、カラフトイソツジなどの植物が生育しています。

ミズゴケ類 (ミズゴケ科ミズゴケ属 *Sphagnum*) はコケ植物の中でも比較的原始的な蘚類です。酸性の場所を好み、主に寒冷な地域に生えますが、熱帯の高地にも見られます。日本には45種以上があ

るとされ、北海道から九州まで全国に分布します。

ミズゴケ類の体を構成する細胞は、葉緑体を含む小さな緑色細胞 (葉緑細胞) と中身のない空っぽの大きい透明細胞の2種類あります。透明細胞には大量の水をため込むことができ、ミズゴケの高い保水力の要因となっています。

ミズゴケ湿原 (高層湿原) は、釧路湿原では温根内や赤沼周辺などで見られます。



図1. ミズゴケの中に生息するツルコケモモ

3. 湿原でひっそりと生きる魚たち (野本和宏)

湿原の王者とも呼ばれるイトウや湿原河川を遡上するシロザケなど、釧路湿原には有名な魚が生息していますが、湿原にはまだまだ知られていない魚がいます。

スナヤツメ *Lethenteron* sp.などのヤツメウナギ類は、脊椎動物の中で最も原始的な生物群の一つとされています。「ウナギ」と似た外見である為、このような名前と呼ばれていますが、生物学的にはウナギなどの魚類とは全く別の分類群に属しています。現在、生きているほとんどの魚が人間と同じ顎口類に属すのに対して、ヤツメウナギは全く別の分類群である円口類に属しています。「ヤツメ」とは目の後ろに並ぶ7つのエラ穴と合わせて、8つの目があるように見えることから、このように呼ばれています。本種の幼生はアンモシーテスと呼ばれ、盲目で口も吸盤状ではなく、エラ穴もはっきりとは見えません。アンモシーテスは川の中のやわらかい泥の中にもぐって生活し、泥中の有機物やけい藻類を食べて生活します。その後、夏から秋にかけて成体へと変態

します。

ヤチウグイ *Phoxinus perenurus sachalinensis* の「ヤチ」(谷地)は湿地を意味し、その名のとおり平野部や湿地帯の沼や小川のほか、釧路川の直線化工事により、取り残された旧川などにも多く生息しています。「ウグイ」という名がつけられていますが、釧路川などに生息するウグイ、エゾウグイ、マルタウグイなどがウグイ属に分類されるのに対して、本種はヒメハヤ属という別のグループに分けられています。ウグイなどのウグイ属魚類が川底の小石に卵を付着させる産卵様式なのに対して、ヤチウグイは水草の根などに付着卵を産みつけます。

4. 知られざる湿原の虫 (土屋慶丞)

ミズグモ *Agryroneta aquatica*

体長10～15mm、黒褐色～褐色、全体に毛深く背中には褐色～赤褐色の毛が生えています。水中生活をする世界で唯一のクモで、水草の間に糸でドーム状の膜を張り、毛深い腹部と脚を使って水面から空気の泡を運びこみ空気室の状居をつくります。水生昆虫・イトミミズ・線虫などの小型動物をとらえ、空気室に持ち帰り食べます(図2)。



図2. 捕らえた赤虫を空気室に持ち帰るミズグモ

釧路湿原からは1977年、キタサンショウウオの食餌動物調査中に発見されました(東亜蜘蛛学会、1977)。日本では5回目、北海道では厚岸町について36年ぶり2回目のミズグモの記録です。世界ではヨーロッパからシベリアにかけて分布する北方系のクモで、日本のミズグモは氷河時代の生き残り(遺存種)だと考えられています。これまでに北海道、青森県、京都府、大分県、鹿児島県の湿原から発

見されていますが、道外では生息環境の悪化などにより絶滅が危ぶまれています。

遠くまで移動することのできないミズグモを守っていくためには、釧路湿原をはじめ今いる生息地を大切に保護していくことが重要です。

ササラダニ

土の中にすみ枯れた植物を食べてくらしているダニのなかまです。体は固い殻におおわれており、アリなどの天敵におそわれるとアルマジロのように体を丸めて身を守ります。大きさは1mmにも満たないため、ふだんは存在することすら気づきませんが、自然界では枯れた植物を食べて土に戻していくという大切な役割を果たしています。

また、種類によってさまざまな環境を好むため、その土地の自然環境がどのようなものか知らせてくれる生き物『環境指標生物』としても注目されています。

クシロフジカワダニ *Oribellopsis kushiroensis*、アイヌジュズダニ *Damaeus ainu*、クシロジュズダニ *Dyobelba kushiroensis*、カナボウジュズダニ *Epidamaeus fortisensillus* の4種は、初めて釧路湿原から発見されて新種として記載され、その後一度も見つかっていないササラダニです。クシロフジカワダニの和名は世界のアオオナダニ科のまとめを最初に行った、藤川徳子博士にちなんでつけられたものです。

釧路湿原総合調査(1971～75)では、鶴居村赤沼付近の高層湿原から46種余りのササラダニが採集されました。調査の結果、釧路湿原には1㎡あたり約115,000個体のササラダニがいて、そのうちモンツキダニ科の1種 *Trhyphochthonius* sp.、アミメオナダニ科の1種 *Nothrus* sp.、コナダニモドキ科のチビコナダニモドキ *Malaconothrus pygmaeus* の3種で全個体数の約50パーセントを占めることが明らかにされています。

5. 夜でも活動する鳥

誰しも「鳥目」という言葉を、一度は聞いたことがあるのではないのでしょうか。「鳥は夜になると目が見えなくなる」と思われたことから、夜に目が効かなくなることを表した言葉です。名前の由来として考えられるのは、ニワトリが夜間になると極端に視力

が低下することや、昼間さかんに鳴いている鳥たちが夜になると静まりかえることなどが挙げられます。しかし、多くの野鳥は夜間も目が見えています。昼間活動しているカラスも、真っ暗な夜空を飛んでいることがあり、川や湖などで日中活動しているカモたちでさえも、実は夜行性の鳥です。このように、人知れず鳥たちは、昼間のみならず夜も視覚を使って飛行や採餌をしています。私たちの想像している以上に夜行性の鳥は多いのです。

夜活動する理由

ではなぜ夜に活動しなくてはならないのでしょうか。理由の1つとしては餌が挙げられます。最もわかりやすいのはフクロウです。餌の中心はネズミですので、夜間活動するネズミに合わせてフクロウも活動しています。またそのために、大きな目と耳、羽ばたいても音がしない翼の構造を持つように進化してきました。他にも、シギ・チドリ類は主に干潟の中に潜むゴカイ類や貝、カニなどの底生生物を餌とします。干潟は、潮の満ち引きによって海の底が現れるため、1日の中でも採餌できる時間が限られています。そのため、潮が引いているのが夜間であってもシギ・チドリたちは採餌をしなければならないのです。

2つ目は、春と秋の時期に見られる「渡り」に関連します。多くのタカの仲間は翼を目いっぱい広げ、日中にできる上昇気流へ乗って、空高く舞い上がってから目的地へ向かって渡りをします。また、ヒヨドリは時に3,000羽を越す大きな群れをつくり、昼間に海を越えていきます。このように、昼間に行われる渡りもありますが、多くの鳥たちは夜渡っています。夜渡る理由として、気流が安定していることがあります。日中は、太陽に暖められた大気の影響によって上昇気流や下降気流が発生します。特に体の小さな鳥は気流に翻弄され、必要以上に体力を消耗してしまいますが、夜間は大気が安定しているため、比較的楽に渡りをすることができるのです。また、飛行という行為は体の熱を急激に上昇させます。夜間は暑い日中よりも涼しいため、体を冷やす効果もあると考えられています。

6. 夜の湿原の鳥「クイナ」

「クイナ *Rallus aquaticus* って・・・あのヤンバ

ルクイナのこと？」と、クイナの話をするとき必ずその名前が出てきます。世界で沖縄県のみで生息しているヤンバルクイナは、1981年に新種発見の報告がされて以来、一躍有名になりました。皆さん、この鳥はご存じかと思いますが、クイナはいかがでしょうか。

体の大きさは約30cmとハトぐらい。見た目は、ずんぐりむっくり。足は太くがっしりとしていて歩くのが速そうです。かわりに、翼は海鳥のように細長い形のグライダー型ではなく、幅広で短い団扇のような形をしています。その翼で空を飛ぶことができるのか不安になるほどです。体の色は、頭から背中側までは茶褐色に黒い斑点があり、顔から胸までは青灰色。そこからお尻までは白黒の横縞模様、クチバシは赤くて細長い形をしています。よく観察してみると、地味ながらなかなか綺麗な鳥だということが見てとれます。では、この鳥は湿原とどのような関係があるのでしょうか(図3)。



図3. 日中でもたまたま姿を現すクイナ

ツル目クイナ科クイナ属、種名 クイナ。多くのクイナ科の仲間は〇〇クイナとつきます。よって日本人にとっては、一番身近な「クイナ」だったのかもしれませんが。また、ツル目ということで、なんとタンチョウと同じ仲間に入っています。見た目も美しく優雅なダンスを披露するタンチョウと、地味な色合いのクイナでは、何か差を感じてしまいますが、近縁の関係にあるようです。共通点の一つ、太くがっしりとした足は、地上を歩きまわることには適しています。また、細長いクチバシも似ており、地中の表層から深層まで餌を探することができます。そして、餌も昆虫類や甲殻類、軟体動物、魚類など共通しています。それらの生き物は湿地に多く生息していることから、ヨ

シ原や水辺の草地、水田、休耕田、河川、湖沼と
いうように、クイナも湿地を好んで生息する鳥なの
です(図4)。そして、タンチョウと違う点は夜間活発
に活動することです。タンチョウが昼のツルだとし
たら、クイナは夜のツルとも言えるでしょう。



図4. クイナの生息環境の一つ(スゲ中心の湿原)

分布

世界の分布は、ユーラシア大陸に広く分布し、北
はロシアの中央部、西はイギリスやスカンジナビア
半島、南は北エジプト、東は日本までと非常に広い
範囲に生息し、標高約1,200mのアルプスにも棲ん
でいます。日本では、東北から北海道までの範囲
で繁殖します(本州中部でも記録あり)。そのため、
釧路へは春頃子育てにやってくる、繁殖を終えた個
体の多くは秋頃から南へ渡りを始め、冬季は本州中
部以南の湿地で越冬するようです。あの体型からは
想像できませんが、海を越え北海道へやってくるか
ら驚きです。

名前の由来

クイナ類は、平安時代から「くひな」の名で知
られており、源氏物語や枕草子などにもその名が
出てきています。クイナには「かねうちとり」「か
ねたたき」「なますとり」など様々な異名があり
ますが、これらは全て「ヒクイナ」のことを表し
ています。夏の夜に「キョッキョッキョキョ…」
と高い声で鳴くので、昔から「くひなたたく」(戸
を叩く)とって歌に詠まれていました。

「クイナ」の正確な語源は不明とされています。
新井白石は「くひ」は来で「な」は鳴くで、「くひな」
は「来鳴く」としています。また、辞典の大言海に

は「鳴きはじめはくひくひと聞ゆと云ふ。なは鳴^{なき}
語根」と書かれています。漢字名は鼈鳥、水鷄、
秧鷄^{あちよう すいけい}がありますが、鼈鳥はカエルを捕食する鳥、水
鷄は水辺にすむ鳥、秧鷄は背の低い鳥と考えられて
います。英名は Water Rail といい、直訳すると水
のクイナ(鉄道のレール『rail』と同じ単語ですが、
クイナという意味もあります)です。ラテン語で
radere は「ひっかく」という意味ですので、そこ
から rail が派生したと思われます。

生態

餌は、前述したような動物質の餌以外に植物質も
食べ、植物の芽や花、根、種、果実を食べるよう
です。魚やカエルを捕食する際、地面にいる獲物の
脊柱を狙い垂直にクチバシを打ちつけて息の根をと
めます。首と体は動かさず、足首の部分を支点にし
て動くことで、強い力を加えることができると考えら
れています。また、時々水中に潜ったり、まれにダ
イビングをして餌を獲るようです。

クイナは一夫一妻制で、渡りをするクイナは毎年
繁殖地に着いてからつがい形成をします。そのこと
からか、渡来してすぐの時期は夜間活発に鳴いてい
ます。巣は地上に構え、巣材は巣の近くにある植物
を利用して造ります。巣はまずオスが場所を選び、
メスが来ると巣の前で翼や尾羽を広げたり、クチバ
シを下へ向けて場所を示したり鳴いたりしながら、
最後はメスが決めます。産卵数は普通6-11個で、抱
卵期間は約20日です。孵化したヒナは、5日もする
と歩きながら自分で餌を獲るようになります。

7. 夜の調査

このような特徴を持つクイナですが、未だに詳し
い生態が明らかになっていない種の一つです。そこ
で、2015年の夏から釧路湿原周辺でクイナの生息
実態調査を始めました。調査を始めた理由は2つあ
ります。1つ目は、その種自体の生態が明らかになっ
ていない部分があること。2つ目に、湿地を好むと
いうことは、タンチョウと同じく湿原環境を反映する
鳥のモデルの1つになり得るかもしれないと考えた
ためです。湿原はわずかな環境の変化に敏感で、
土壤の乾燥化や開発行為などが進めば植生は変わ
り、そこに生息する鳥たちの種類構成や数も変化し
ます。幸い、このクイナという種はまだ国の絶滅危

惧種に指定されていません。そのため、比較的数が多い鳥ということになっていますが、その実態は正確に把握されていない地域がほとんどです。だからこそ、調査の必要性があると考えています。

具体的な夜の調査方法ですが、一つ目は定点調査です。指定の場所に一定時間留まり、そこで確認できたら記録します。夜なので相手の姿は見えないため、声を聞き分けて判断します。次に、鳴き声反応調査（プレイバック法）です。これは、ポータブルスピーカーなどから目的の野鳥の鳴き声を再生し、その反応を聞くことで生息状況を把握する方法です。これも有効な方法ですが、「知らないヤツの声がするぞ!」ということ等から反応して声を出すため、繁殖期の鳥たちに何かしらの影響を与える可能性があります。他にも、現在はICレコーダーが普及しており、タイマー録音機能が可能な機種であれば、生息していそうな場所に設置しておき、後日回収して確認するという方法もあります。

調査を始めてみて

昨年度から調査をし始めたので、実際にはまだ分かっていないことがほとんどです。調査出来ている範囲も広大な釧路湿原のごく一部です。ただ、確実にクイナは生息していて、好みの生息環境にはある程度の数が生息していることは明らかになりました。また、鳴き声に関する情報も集まっています。調査中にICレコーダーを用意しておき、クイナが鳴いたら録音してデータを集めています。クイナという種類は、なわばり誇示や争いに勝ったとき、メスへの求愛など様々な鳴き声を発することは知っていましたが、実際に現場でその声を聞き実感しています。

今後、クイナはいつからいつまで釧路に生息しているのか、どういう環境までなら生息できるのか、どのくらいの数があるのかなど、調査を継続していき、クイナが湿原の価値を表す指標種となるように目指したいと思います。

8. ミンクの存在

クイナの生息状況を脅かすものとして、湿原環境が悪化すること以外には、クイナを捕食する生き物の存在があります。湿原に生息するチュウビなどの猛禽類もクイナを捕食している可能性があります。釧路でまだその事実は確認出来ていません。現在

確認できているのは、中型哺乳類です。在来動物で可能性がある種といえば、クロテン、キツネ、タヌキあたりでしょうか。彼らにとって湿原は好適な生息環境ではありませんが、湿原の林縁部までなら生息しています。そして、外来種のミンク *Mustela vison* もその一つです（図5）。



図5. 湿地で獲物を探すミンク
(撮影：温根内ビジターセンター)

イタチ科のため肉食性で、ノネズミ、鳥類、ヘビやカエル、河川や湖で甲殻類や魚類も獲ります。また、泳ぎが得意なため他の中型哺乳類より湿原域へ入り込める能力を持っています。ミンクの巣穴の目の前にクイナが食べられた跡があるなど、ほぼ確実に捕食しているだろうと予想されます（図6）。今後のクイナの保全に向けて、これらの捕食者の存在がクイナにとってどのような影響があるのかを調査する必要があると思います。



図6. クイナがミンクに捕食されたとみられる跡
(撮影：温根内ビジターセンター)

開催日：平成28年7月2日（土）～9月25日（日）
会場：釧路市立博物館 1階マンモスホール

釧路市立博物館創立80周年記念の取り組み

80周年プロジェクトチーム*

博物館創立80周年記念企画展

①知られざる釧路湿原(7月2日～9月25日)

湿原に生きるさまざまな動植物の中でも、あまり知られていない、湿原を支える重要な生き物たちにスポットを当て、知られざるその役割を紹介しました。

■観察会「知られざる釧路湿原の魅力発見！」

- ・釧路湿原の昆虫観察会(5月29日)
- ・じっくり観察 釧路湿原の野鳥(6月12日)
- ・釧路湿原のスゲ観察会(6月26日)

■おひさま夏休み・博物館の展示を作ろう～湿原に触れる・感じる・聞く。どっぷり浸かる1日～(8月2日・11日)

釧路湿原の鳥・植物・昆虫をテーマに、小学校3～6年生を対象として開講。1日目は調査、2日目に発表を行いました。(協賛:おひさまクリニック)

■講演会「水田は湿原である一湿地の絶滅危惧鳥類を護るためには」(8月7日)

ラムサール条約登録湿地であり、絶滅の危機にある野鳥「オオセッカ」が世界で最も多く生息する「仏沼」(三沢市)で調査研究・保護活動を行っている高橋雅雄氏(NPOおおせっからんど)にお話をいただきました。

■上映会・講演会「釧路湿原を撮り続けた20年～炬げた「挽歌」の中塚哲夫さん～」(9月4日)

(釧路市立博物館友の会主催) 中塚哲夫さん作の映画「湿原は生きている」などの上映、共に釧路川を下った吉崎文浩氏による講演を開催しました。

②釧路・根室の簡易軌道(10月29日～1月15日)

昭和初期から40年代にかけて開拓と農業を支えた「簡易軌道(殖民軌道)」。鶴居・標茶・浜中・別海の各町・村営軌道について、関係者、関係自治体、鉄道愛好家の協力により、写真と資料で紹介します。(来年2～6月、釧路空港ビルや関係各自治体にて巡回展を実施)。

■バス見学会

簡易軌道の痕跡(廃線跡)や保存車両を見学、また当時の関係者にお話を伺い、当時を振り返ります。

- (1) 鶴居・標茶編(10月16日) (2) 浜中・別海編(11月6日)

■NHK番組で振り返る「簡易軌道と酪農の記録」

(11月12日)

主催: NHK釧路放送局・釧路市立博物館

■釧路・根室の簡易軌道講演会(11月26日)

「北海道殖民／簡易軌道」湯口 徹氏(鉄道研究家)
「唯一無二の地域遺産をどう活かすか～道内・そして全国の事例から～」名取紀之氏(㈱ネコパブリッシング編集局長・日本鉄道保存協会顧問)

■酪農・乳業と簡易軌道講演会(1月14日)

佐々木正巳氏(雪印メグミルク(株))

創立記念日〔7月14日〕記念イベントなど

①無料入館

当日は常設展示室への入館を無料としました。

②ポストカードブック

「スパカッ」「釧路駅」など、好評をいただいていた「くしろ濃縮100%」メッセージポスター全13種類をポストカードブックにまとめ、先着500名様に配布しました。

③80周年記念ミュージアムコンサート

(博物館友の会と共催)

チェリスト・原 永里子さんの演奏にて実施しました。

④マンモスホールのデコレーション

マンモスの骨格標本のまわりをカラフルなバルーンでデコレーションしました。

⑤はっくん風船プレゼント

博物館キャラクター「はっくん」の入った特製風船を小学生以下の来館者にプレゼントしました。

80周年記念ミュージアムグッズの発売

80周年を機に大幅に拡充しました(発売:博物館)



木製ペン立て(釧路管内産カラマツ材使用)・木製はっくんマグネット(同オンコ使用)・トートバッグ・クリアフォルダ・缶バッジ(7月14日発売開始)・ポストカード(今年度末発行予定)

* 石川孝織・加藤ゆき恵・戸田恭司(釧路市立博物館)

友の会)。

なお、マルハニチロ北日本(株)釧路工場製造の缶詰を使用した「博物缶」を、創立80周年と魚類展示リニューアル完成(11月)を記念して発売する予定です。

また日本郵便(株)より、フレーム切手・釧路市立博物館シリーズ【いのちをつなぐ「釧路の動物たち」】が9月1日より発売開始となりました(常設展示室のはく製を撮影)。

80周年スタンプラリーの開催

5月から来年3月までに開催する5つの企画展と、11月の魚類展示リニューアル完成、合計6つの展示を巡るスタンプラリーを開催しています。

〔ハーフラリー賞(3つ以上集めた方)〕(先着200名)

80周年オリジナルグッズ

(クリアファイル)

〔完全制覇賞(6つ全部集めた方)〕(先着100名)

〔くしろ濃縮100%〕ポストカードブック、博物館入館招待券(ペア)、80周年オリジナルグッズ(トートバッグ)



くしろバス車内に釧路の自然・歴史を紹介する ポスターを掲出

くしろバス(株)の協力により、6月15日から「100系統 イオン線」(博物館～イオン昭和)に、釧路の自然・歴史を紹介するポスター(12種類)を掲出しました。釧路の自然・歴史の素晴らしさ、博物館創立80周年をお伝えするとともに、公共交通機関の利用促進の一助となることも目的としています。

2016年6月14日、博物館は創立80周年を迎えます。

エソキウサギ
ユーラシア大陸に広く分布するウサギで日本では北海道のみに生息し、世界的な分布の南限種となっています。夏は、ほぼ全身茶色の毛をまとっていますが、冬は目の先端の黒色を除き、全身が純白の毛に生え変わります。食性は植物中心で、平地から高山の森林、草原など様々な環境に生息しています。夜行性のため昼間は、やみ-岩かげ-木の下に隠れていて姿を見つにくいのですが、冬は雪上に足あとがつくことでその存在を感じることが出来ます。

くしろバスに乗って
80周年の
博物館へ行く
釧路市立博物館

コーチャンフォー釧路店「学芸員の書棚」

(株)リライアブルの協力により、コーチャンフォー釧路

店にて、当博物館の学芸員がお勧めする書籍を紹介する「学芸員の書棚」コーナーを設置しました(7月14日～8月31日)。

80周年記念ブックカバーの提供

80周年を記念した博物館オリジナルブックカバーを作成し、博物館WebからPDFデータをダウンロードいただけるようにしました。

来館者アンケート・缶バッジプレゼント

創立記念日から夏休み期間にかけて、来館者(常設展示ゾーンへの入場者)にお住まいの地域をお尋ねするアンケートを実施、回答者にオリジナル缶バッジをプレゼントしました。

記事掲載・マスメディアへの出演

■新聞・テレビ報道

5月23日「博物館80周年事業続々 6企画展・展示 スタンプラリー始まる 7月には記念ウィーク」釧路新聞

6月19日「地域の自然や歴史ポスターに 釧路市立博物館 路線バスで80周年PR」釧路新聞

6月20日「創立80周年記念 スタンプラリー 釧路市立博物館」北海道新聞

6月21日「80周年 博物館へ行こう くしろバスにポスター 展示関連の解説付き」北海道新聞(夕刊)

6月28日「創立80周年 様々な催し企画」読売新聞

7月5日「湿原の生き物知って 市立博物館で企画展 クイナなど紹介」北海道新聞(夕刊)

7月10日「多彩なイベント企画 釧路市立博物館 14日に創立80周年」北海道新聞(夕刊) 7月13日「市立博物館 創立80年 はっくん 記念グッズに あす観覧無料、コンサートも」北海道新聞(夕刊)

7月13日「釧路の魅力をポストカードに」NHK

7月25日「チェロの調べ 博物館に響く 釧路市 創立80周年記念演奏会」北海道新聞(夕刊)

■ラジオ出演

①7月11日「市役所からこんにちは」出演:白幡敏弘(館長)

②7月14日「m-breeze」出演:加藤ゆき恵(植物)

③7月14日「テツ男・テツ子の部屋」出演:石川孝蔵(産業)

■その他

JR北海道特急車内誌「The JR Hokkaido」2016年10月号巻頭にて、当館80周年が特集されます。



4年ぶり3回目の国後島

2016年8月にビザなし専門家交流訪問で、4年ぶり3回目となる国後島へ行ってきました。前回2012年の調査は国後島南部を回りましたが、今回は国後島太平洋側の中北部を訪れました。また、墓参団に同行させていただいて択捉島北部の薬取付近（トッカリモイ）にも短時間でしたが上陸することができ、海食崖に貼り付くように生育するチシマコハマギクなど、さまざまな花が見られました。

国後島の調査は、初日から不測

の事態が続発。台風5号の影響で波が高い浜辺で、移動に使っていたトラックが砂にはまって動けなくなったり、ようやくたどり着いた小屋の外にヒグマが出没したり。翌日には荷物を運んでいた小型トラックが川を渡る時に水没して着替えなどが水びたしに。更に翌日には数メートル先にヒグマが出没し、調査を途中で断念せざるを得ませんでした。国後島に生息する「白いヒグマ」は見られませんでした。

調査は島最大の街である古釜布から約35km北東にあるセオイ川のロッジを拠点に行いました。整備された道路であれば車で1時間足らずの距離ですが、島の北東部は一般の車が通れるような道はほとんど整備されておらず、バギーや小型トラックで移動します。場所によ

てはオオイタドリなどをなぎ倒し、道なき道を守るバギーに揺られながら、思わず「僕の後ろに道は出来る…」と独り言つのでした。

今回訪れたセオイ川～音根別川の海岸付近は、大学院生だった2003年の国後島調査で訪れていた場所でした。当時、宿泊に使った2ヶ所的小屋（自然保護区等レンジャーの監視小屋）も健在で、1つはそのままの姿、もう1つは当時の面影を残しながらも大規模に改修されていました。

何度訪れても国後島の自然は素晴らしく、美しいだけではない「むき出しの自然」を感じます。再び訪問する機会があればいいなあ、と思いながら、台風6号の影響で予定より1日早く、古釜布をあとにしました。（加藤ゆき恵）

天然記念物に出会って

博物館に異動になり、これまで全く知らなかったことがあまりに多いことに自分自身でびっくりしています。

はじめて実物と対面させてもらった天然記念物のキタサンショウウオは目の前で見ると実にかわいいです。サンショウウオといえばテレビで見たオオサンショウウオのイメージが強く、巨大で少しグロテスクなものと思っていましたが、既存の概念を打ち壊すかわいさです。また、卵のうの美しさは見てみないと正直わからなかったのですが、「湿原のサファイア」と呼ばれる生まれたての卵のうでなくても十分です。本当にきれいです。

博物館の工作室で飼育されてい

るエゾサンショウウオも見せていただきました。人になつくといわれるだけあり近づくと頭を少し傾けて「ん？」という表情で大きな瞳で見つめてきます。いつも世話しているN学芸員の対応と私の対応では甘え方が違うと思いました。ウルウルした目で見つめられるとちょっと前のCMに出てきたワンちゃんと同じくらいの破壊力です。こんなにかわいい生物がいたことに気が付くのが遅すぎました。

ヒブナもはじめて実物を見ました。体の色が徐々に退色し、最終的に真っ白になることを知り非常に驚きました。その中間の白と橙の個体に対して「キミもそのうち全身が真っ白になるんだよ」と教えてあげたいです。悟ったようなため息をついて「あ、そう」とつれない答え

が返ってきそうですが。人間も最終的に白髪になりますが何か関係があるのでしょうか。

これまでキタサンショウウオとヒブナの話しかしていませんが、そのほかにもたくさん驚きがありました。すべてを紹介するとなると紙面が足りません。本当に素晴らしい場所です。

異動になってまだ少ししか在籍していませんが、知りたいことを調べるお手伝いも博物館の役目なのだと窓口において実感しました。来館する方々の疑問点を一生懸命に答えようとする学芸員を見ていると本当に頭が下がります。これからは「知りたい!」に答えようとするみなさんと仕事をさせていただければ嬉しいと思います。（渡邊聖知子）

博物館ニュース

●博物館日誌抄 (平成28年3月～8月)

3月

- 1日 企画展「未来へ残す私たちの記録 ハーバリウム霧多布」於Mホール、5月8日迄。
- 5日 「化石クリーニング教室」於講堂、18名。
- 6日 学芸員トーク「標本から探る釧路の植物いま・むかし」於講堂、41名。
- 13日 学芸員トーク「ヒトと比較して考える～鳥の感覚機能について～」 「釧路・幻の鉄道を追って」75名。
- 20日 学芸員トーク「目で見る考古学」 「色丹島の遺跡分布調査に参加して」30名。
- 26日 「植物の名前の調べかた講座」於会議室、11名 (申込19名)。
- 31日 魚類常設展示更新「内覧会」於常設展示室。

4月

- 1日 福岡明子専門員学校給食課に異動、渡邊聖知子主任地域福祉課より着任。昇格:石川孝織 (学芸専門員)。石川学芸専門員、早稲田大学文学学術院非常勤講師就任 (28年度前期)。魚類常設展示更新。
- 2日 「ハーバリウム霧多布」於霧多布。
- 16・17日 展示解説「ようこそ釧路へ」於常設展示室、74名。
- 17日 春採湖畔「探鳥会」24名。
- 19日 「トランクキット」貸出開始。
- 29日 「植物の名前の調べかた講座」於会議室、11名 (申込13名)。

5月

- 5日 「博物館で遊ぼう」於講堂、163名。
- 7日 「ハーバリウム霧多布」。
- 10日 「キタサンショウウオ生息調査」於安原。
- 14日 私の博物館「秋元亮太写真展・春採湖歳時記」於Mホール、6月26日迄。創立80周年記念スタンプラリー、29年3月19日迄。
- 15日 「探鳥会」31名。
- 18日 友の会「役員会」。
- 21日 春採湖畔「草花ウォッチング」25名。
- 22日 「初夏の探鳥会」於別保、31名。
- 25日 道東三管内博物館施設等連絡協議会「役員会」「総会」於会議室、23名。
- 27日 友の会「総会」「懇親会」於アクア・ホール。
- 28日 「タンチョウ講演会～江戸時代の

史料から探るツルと人の関係史～久井貴世氏、於講堂、92名。「鶴居村営軌道DLを学ぶ会」(博物館共催)於丸瀬布森林公園いこいの森、48名。

29日 「釧路湿原の昆虫観察会」於釧路湿原、23名 (申込27名)。

6月

- 1日 早稲田大学文学学術院嶋崎尚子教授研究滞在 (9月末迄)。
- 4日 「ハーバリウム霧多布」。
- 5日 歴史探訪会「まちなみ散歩」於米町、41名。
- 11日 しらべてみよう「春採湖の昆虫」22名。
- 12日 「じっくり観察会 釧路湿原の野鳥」於釧路湿原、23名 (申込33名)。
- 18日 「草花ウォッチング」6名。
- 19日 「探鳥会」13名。
- 25日 「オンネトー・ジオツアー」42名(アンコール開催:申込75名)。「ハーバリウム霧多布」。
- 26日 「釧路湿原のスゲ観察会」於釧路湿原、22名 (申込40名)。

7月

- 1日 巡回展「道東の博物館園が選ぶイチオシの資料・風景」於釧路空港、7月28日迄。
- 2日 「ハーバリウム霧多布」。企画展「知られざる釧路湿原」於Mホール、9月25日迄。
- 3日 「釧路・足寄合同化石観察会」於阿寒町蘇牛、72名。
- 9日 「春採湖の昆虫」10名。
- 14日 創立80周年記念日。「ミュージアムコンサート」原永里子氏、於常設展示室、120名。
- 16日 「草花ウォッチング」22名。
- 17日 「探鳥会」25名。「展示解説」於常設展示室、8月28日迄の合計7日。
- 18日 「なつやすみ自由研究屋台村」於図書館。
- 23日 「夏休み昆虫観察会in動物園」於動物園、25名。

29日 博物館実習、3名、8月5日迄。
30・31日 「夏休み自由研究相談所」於Mホール、13名

8月

- 2・11日 「おひさま夏休み 博物館の展示をつくろう」於温根内・講堂、4名。
- 5日 「化石レプリカ教室」9名。加藤主任国後島・択捉島出張、14日迄。
- 6日 「ハーバリウム霧多布」。
- 7日 講演会「水田は湿原である～湿地の絶滅危惧鳥類を守るためには～」高橋雅雄氏、於講堂、22名。
- 13日 「春採湖の昆虫」9名。
- 20日 「草花ウォッチング」2名。
- 21日 「探鳥会」雨天中止。
- 24日 友の会「博物館まつり実行委員会」。
- 30日 「まちなみ散歩」雨天中止。

●埋蔵文化財調査センター日誌抄

4月

16日 史跡北斗遺跡展示館開館、11月15日迄。

5月

1日 「堅穴住居で屋根ふき体験」於北斗遺跡、36名。
14日 「音別町遺跡探訪会」28名。

6月

21～26日 ハルトルチャランケチャシ跡草刈。

7月

21日 まちなか企画展「こうこうdeこうこ～市内高校郷土史研究部の軌跡～」於MOO他、8月31日迄。
30日 「夏休み親子土器作り教室」於講堂、29名。

31日 「市内国史跡探訪会」雨天中止
指定管理者自主事業「屋根ふき体験」於北斗遺跡。

8月

11日 指定管理者自主事業「弓矢体験」。
14日 指定管理者自主事業「火おこし体験」中止。



3/31 魚類常設展示更新「内覧会」



5/1 堅穴住居で屋根ふき体験

●入館者 (平成28年3月～8月)

月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
● 一般						
個人	392	527	898	662	1,046	1,496
団体	0	150	97	49	135	123
● 高校生						
個人	18	19	13	5	15	51
団体	0	0	0	0	0	0
● 小中学生						
個人	83	119	171	60	152	282
団体	0	0	0	144	67	18
● 55パス	7	2	12	5	19	20
無料入館者	801	984	1,678	1,490	2,190	1,508
計	1,301	1,801	2,869	2,415	3,624	3,498